





### Ⅲ. 分析結果

#### 腐植組成

Sample No.	HR	HS/HT	a1	b1	PQ1	Δlogk1	RF1	a2	b2	PQ2	Δlogk2	RF2	Type
KR1-1	185	53	39.6	47.3	46	0.590	95	7.0	4.3	62	0.599	88	A A
KR1-2	228	51	51.0	54.5	48	0.577	104	6.8	3.0	69	0.600	94	A± A
KR1-3	162	59	39.0	42.2	48	0.575	115	9.7	4.1	71	0.550	120	A± A±
KR1-4	133	55	34.6	28.0	55	0.569	120	8.4	2.8	75	0.546	121	A A
KR1-5	106	54	22.0	22.9	49	0.602	116	9.3	3.0	75	0.549	125	A A
KR2-1	386	63	170.6	61.1	74	0.528	138	10.9	2.5	81	0.521	135	A A
KR2-2	376	65	179.9	50.5	78	0.531	140	13.0	2.0	87	0.512	136	A A
KR2-3	376	65	182.6	47.2	79	0.532	138	13.3	1.7	89	0.511	139	A A

KR1: 試坑1, KR2: 試坑2. HT: 全腐植(O. IN 過マンガン酸カリ溶液 消費量 ml 数 以下同)  
 HE: フルリ可溶腐植. a: 腐植酸 b: フルボ酸. PQ: 腐植酸%.  
 Δlogk: 色相係数. RF: 相対色度. 添字1, 2は 対応するピロリン酸ナトリウム可溶部.  
 Type: 腐植酸のタイプ.

表に腐植組成分析の結果を示した。分析は熊田法に依った。KR1は、断面を图示した地点1、KR2は地点2の試料である。KR1試料は、KR2試料に比べて、可溶性腐植の割合(HE/HT)と水酸化ナトリウム可溶の腐植酸の割合(PQ1)が低いが、腐植酸の相対色度(RF1およびRF2)は80以上で、典型的な火山灰起源の黒ボク土が持つ腐植酸のRFに匹敵する暗色を示した。最も右の欄のTypeは、熊田法による腐植酸型の分類を示すが、典型的な黒ボク土の腐植酸はA型である。土の記号は褐色森林土に多い緑色腐植酸の有無を示す。KR1断面で、A<sub>11</sub>層の色がやや明るく、腐植酸の相対色度(RF1およびRF2)がKR1-1においてKR1-2より低いこと、また、KR1-2とKR1-3に緑色腐植酸が含まれていること、などから、黒ボク土が森林の下で、褐色森林土の方向に向かっていると考えられる。また、前記に述べたように、A層のなかに攪乱の形跡があることから、この黒ボク土が斜面を徐々に進行して傾斜の緩やかな面で集積したと思われる。なお、沢井は、第2回研究会で、KR1断面の全層にわたって火山ガラスが含まれていることを報告したが、このことも、同様の意味を示すといえよう。

以上のより、現在起源が不明な黒ボク土は、火山灰と関連して生成し、永年にわたる土壌の移動によって斜面からは失われたが、緩い傾斜面では保持されて、散在して残っているものと考えられる。いわば「生きた化石」的土壌と推定される。